

フリードリヒ・シュペーのこと (2)

——善き牧者——

横 塚 祥 隆

はじめに

イエズス会創立時の同志の一人であったフランシスコ・サビエルに倣って、殉教も辞さない覚悟をもって東洋宣教へと派遣されることを願ったフリードリヒ・シュペーの熱意は叶えられず、代りに活躍の場として指示されたのは宗教改革と三十年戦争とによって荒廃したドイツ、シュペー自身の生まれた地のノルトライン＝ヴェストファーレンの地域であった。

プロテスタント信仰を受容れていたその地で再カトリック化に献身する最中に襲撃され、瀕死の重傷を負ったのは1629年4月のことであった。約四ヵ月後に回復し、再びイエズス会学寮や大学で教鞭を執り始めた。そうしたシュペーの再カトリック化宣教活動を支えた自身の信仰、そして信徒や信仰上の後輩たちに求めた信仰はどのようなものであったのか。それをもっともよく表しているのが『黄金の徳の書』である。しかし本稿ではシュペーの活動の実際を、土地の知識人ユンカーと若い女性たちを相手に書かれた書簡によって瞥見することにする。それらに述べられていることが魂の導き手シュペーの根本的思想にも通じていると思われるからである。

1. カトリック教会改革と再カトリック化の中で

1618年にケルン選帝侯フェルディナント・フォン・バイエルンがパーダーボルンの司教になって以後、16世紀前半までにプロテスタント信仰を受容れていたパーダーボルンの再カトリック化がようやく本格化した。22年にはクリスティアン・フォン・ハルバーシュタットのプロテスタント軍などによって一時期占拠され、イエズス会も町を追われたが、カトリック陣営の総司令官ティリー將軍がクリスティアンなどボヘミア反乱軍を打ち破り、23年にはパーダーボルン教区一帯はカトリックの支配するところとなった。

23年にはイエズス会学寮も回復され、講義が再開された大学ではシュペーも哲学を講じるようになった。シュペーはまた同市の聖パンクラーツ教会の聴罪司祭及び要理教師となり、同時に同市周辺のプロテスタント信仰を受容れていた貴族の間で宣教活動に従事した。24年には、プロテスタント側に付いていた土地の有力貴族をカトリック教会に引き戻そうとしていたが⁽¹⁾、その活動ぶりを窺わせるものに同地域のユンカー、ニューフェゼンに宛てたシュペーの書簡やケルンの代官シュタイン家の令嬢たちに宛てて、正しい信仰について説いた書簡がある。それについては後述することにして、この時期前後のニーダーライン・ヴェストファーレンにおける再カトリック化の様子とシュペーの動向を簡単に追っておくことにする⁽²⁾。

ケルン大司教ディートリヒが目論んでいたパーダーボルン近傍の貴族ヨアヒム・ビューレンのカトリックへの改宗は失敗したものの、その姉妹の一人はヨアヒムの死後、親交のあった女性たちを通じてイエズス会に近づき、1613年にはカトリックの信仰を受け入れると宣言した。それによって再カトリック政策はその領地や臣下にも及び、教区における宣教がイエズス会に委ねられ、プロテスタントの説教師の解任とカトリックの司祭の導入が行われ、28年にはすべてのプロテスタント信者がビューレンの領地から排除された⁽³⁾。

しかし一時期健康の衰えを見せたケルン大司教ディートリヒとローマ教皇庁やイエズス会との間にも後継者指名を巡っての齟齬が生じ、またパーダーボルンのプロテスタントはヘッセンやブラウンシュヴァイクといった隣り合うプロテスタント地域との交流によって、勢力を回復しつつあった。そうした状況でディートリヒもその没後にパーダーボルンの司教となるフェルディナント・フォン・バイエルの協働司教就任を受け入れ、同時にイエズス会

との間に宥和をはかり、更に健康を回復してからは再カトリック化とカトリック教会内の改革を一層強力に推し進めるようになった⁽⁴⁾。

26-27年にはシュパイアーでイエズス会における通常の修練期間を終え、26年にはスペインなど外国から来た兵士たちが収容されている病院での司牧と看護に携わるために外国語修得を望み、ミラノで学習の機会が与えられることになったが、ケルン管区長の許可が得られなかった。その後27-28年にはケルンのギムナージウムの教壇に立ち、学校劇いわゆるイエズス会劇の制作・上演にも関りを持った⁽⁵⁾。

シュペーがパーダーボルンやヒルデスハイム近郊での宣教活動に再び携わるようになったのは28年であった⁽⁶⁾。当初シュペーはさしたる抵抗や妨害に遭うこともなく活動を続けることができたようであり、ローゼンフェルトによれば現実感覚に優れたシュペーは農民との接触の仕方も心得ており、冗談を言い合い、慰めを与え、相談に乗り、説教も平易で、殊にその受難節の説教は女性たちに好評で、連れ合いたちにも聞かせようとしたという⁽⁷⁾。その間には選帝侯役所に願って農民たちのために穀物の種40荷の提供を受けた。

しかし市内では、市参事会に参加できるのはカトリック教会に属するものに限られ、排除されたプロテスタントに留まっているものたちの態度を硬化させ、そのような措置を促しているのはヒルデスハイムのイエズス会士たちであると看做されていた⁽⁸⁾。中傷する文書や投石は日常のことであり、神父の単独での外出は危険視されていた⁽⁹⁾。そうした情勢の中で、シュペーに対する襲撃が起こった。通常の宣教活動の際には複数で移動していたようであり、シュペーもまたそれにしがっていたが、この時は日曜日のミサに向うところだったので、単独であったのかもしれない⁽¹⁰⁾。

再カトリック化が始まって以来のこの地方における新旧両教会の間の対立

やケルン大司教ディートリヒの強引な政策と地元教区共同体の軋轢の表れを端的に示していると思われるこの襲撃については六つの報告があったようである。ここではその中から二通を選んで取り上げる。その一つは1629年4月29日の襲撃の当日にパイネの代官からヒルデスハイムの最高法院長 Kanzler に宛てたもの、他の一つはヒルデスハイムのイエズス会学寮長の管区長宛であり、5月1日の日付を持っている⁽¹¹⁾。前者は比較的短いのでそれを紹介し、後方で補うことにする。

「今朝シュペー神父がミサを上げるために近傍のヴォルトルフへ馬で赴く途上、騎乗の襲撃者が神父を待ち伏せし、神父をめがけて二挺のピストルを発射したが、外れた。それに続いてその男は敬虔な神父に剣をもって切りつけ、ために神父は頭部に7箇所と背中に2個所の傷を負った。頭部の傷は致命的なものに思われた。頭蓋骨はいくつも口を開け、軟脳膜 *pia mater* は酷く損なわれていた。それらの傷を当地の理髪師 Barbier に縫わせたが、容態は芳しくない心配される。最高法院長様が寛大なお心で、今日のうちにも医師と理髪師を至急当地へ遣わして下さるようお願い申し上げます。全能の神が恩寵とお慈悲をもって奇跡的に力をお貸しくださいなれば、手遅れにならないかと心配しております。以上心取り乱したままに、最高法院長さまにお知らせ申し上げる次第でございます。」

学寮長による報告はこれより詳しく襲撃の様子を記述した後に、辛うじて教会にたどり着いたシュペーの有様を述べている。重傷による失血のために眩暈に襲われながらも、村人たちにその日の福音、善き羊飼いの福音⁽¹²⁾を読み聞かせ、さらに讚美の歌「テ・デウム」をドイツ語で歌うように促し

た。かつてこの教会で説教師として務めていたルター派の副牧師が駆けつけて、シュベアーをパイネに同伴した。パイネの代官は直ちにマスケット銃隊と騎馬隊に襲撃者を追跡、搜索させた。駆けつけた医師によって行われた発熱を防ぐための瀉血によって、容態は安定し、奇跡的に一命をとりとめたことなどが冷静に書き留められている⁽¹³⁾。

この事件については何も解明されることなく、ただ襲撃者はブラウンシュヴァイク地区に逃走したと推測されているだけのようである。その後シュベアーは約四ヶ月で回復し、ヒルデスハイムの東、ブラウンシュヴァイクとの境界近くにあるイエズス会の所領ファルケンハーゲンで静養し、11月になってパーダーボルン大学に復帰した。この静養中には著述に専念していたようであるが、次には時期を遡って先に触れたパーダーボルンのユンカー、ニーファーゼンに宛てた書簡によって、シュベアーの宣教活動の内実を垣間見ることにはしたい。そこにはこの時期におけるトリエント公会議の決定に忠実に沿って、再カトリック化を進めようとしたカトリック乃至イエズス会とプロテスタント知識人との対立の要点の一つが明確にされている。

2. ユンカー・ニーファーゼンへの書簡——聖体拝領をめぐる

1620年代のパーダーボルン教区におけるカトリックとプロテスタントとの間の確執についてはすでに若干触れたが、その対立の遠因の一つに17世紀初頭に同教区にいわゆる「典礼規定書」Agende が導入されたことによる。この規定書はトリエント公会議の教令に忠実に則ったもので、これによってカトリックの聖職者たちが「教区において誤ることなく、一致して秘跡の神秘を實踐する」ことが可能になった。しかしそのことがプロテスタント信徒で

あるビューレンなど土地の貴族や有力者たちの間に激しい反発を生み出して
もいた⁽¹⁴⁾。

その対立点の一つが、秘跡の執行はトリエント公会議によって定められた
形式によってのみ行われなければならないとされたことであった。その対立
を端的に示しているのが、シュペーのニーファーゼン宛の1624年7月4日付書
簡である。

前の週の日曜日にシュペーは、ルター派に属するユンカー、ニーファーゼン
の館を訪れていた⁽¹⁵⁾。その食後の会話の中で話題が厄介な信仰の問題に及
び、シュペーも積極的に参加した。そこでニーファーゼンはトリエント公会議
が定めた信仰宣言の第8項の「唯一の普遍的教会」を信じる、ただし教皇の
最高支配権と一般信徒に対する聖餐授与はキリストの御体であるパンのみで
十分であるすることは受け入れられない。ことに聖餐授与は必ずパンとブド
ウ酒によって行われるべきであると主張した。

シュペーの書簡はその二点を巡っての論理的で厳しい⁽¹⁶⁾、しかし同時に
相手の魂の救済を心から願う友情に溢れたものである。非常に長いので要約
して紹介する。

館を辞して以来ニーファーゼンの人々のことが心に懸かっている。もう一度
親しく話し合いたいと願っているが、実現が難しいので「ペンとインクを持
って」自分の思いをお伝える。そのような冒頭の挨拶に続いて、シュペー
はニーファーゼンを「誤った道からキリストの正しい牧場と羊小屋へと呼び戻
したい」という願いを披瀝して、この書簡を読み終わったら自室に引籠も
り、自分の罪に想いを致し、「聖霊の天なる光と恩寵に心から呼びかけ、究
極の根源的な真理を認識するように、考えてほしい」と願っている。ついで

五項目にわたってシュベール自身の信仰を述べつつニーフゼンへの反論を展開する。

第一に、正しい信仰を持たず、信仰宣言のすべての箇条を信じないものは、永遠の罰を受けることを、ヨハネ福音書3章18節「御子を信じるものは裁かれぬ、信じないものは既に裁かれている」とルカ16章16節「信じて洗礼を受ける者は救われるが、信じないものは滅びの宣告を受ける」を引き合いに出して説いている。第二では信仰宣言の「聖霊と聖なる普遍の教会を信じます」という第8項は論じる要もないほど自明のことであると断言し、そのことを第三においてカトリックの教えが身分の上下を問わず広く信じられ、殉教も辞さない人々によって全世界に広められている。そのような普遍的教会はこの地上にはカトリック教会、教皇の教会以外には存在しないとたたみかけるように論証しようとする。第四はニーフゼンが否定したカトリック教会の一般信徒に対する秘跡執行について、教会とその信徒が「キリストの御体と御血の神秘というもっとも重要な事項において、神の御言に逆らって振舞えば」その教会がいかにして聖なるものと言えようかと問いかける。そしてカトリック教会がこの点において誤っており、御言に反していると確信しているとすれば、ニーフゼンは聖霊を信じ、聖なる普遍の教会を信じているとは言えないと宣言する。そのように教会が誤っていると言うのは、「子どもが母親に向って、20歳の若者が老練な父親に向って」誤っていると言うのと同じであり、そのような思い上がった傲慢は罰せられるだろうと警告を発している⁽¹⁷⁾。

以上のように述べた後で、シュベールは自分の厳しすぎたかもしれない、遠慮のない言葉は、決して悪意からではなく、あくまでもニーフゼンが魂の永遠の救いを真剣に考えてくれることを願ってであることを付け加え、恩寵

の光に照らされたニーフゼンの心はその救いの光を認識し、真実の信仰を回復するようにと述べて書簡を結んでいる。

この「論争」の背景にある秘跡の授与を巡ってのカトリック教会とプロテスタントの立場はどんなものであったかを、トリエント公会議（1545-63年）の教令とルターの見解によって瞥見しておくことにする。

ミサ乃至礼拝における「聖体拝領乃至聖餐式」がキリストの体と血を現すパンとブドウ酒とによって行われるべきかどうかについては、すでにコンスタンツ公会議（1414-1418年）による教令で「司式者は両形色（パンとブドウ酒：筆者）のもとに、そして信徒はパンの形色のもとにだけ拝領するという習慣」を正当なものとしていた⁽¹⁸⁾。これに対してルター派などプロテスタント諸派は異を唱えていた。

ルターによれば、教令を弁護するものたちはヨハネ福音書6章でキリストが「わたしは活きている杯である」と言わずに、「わたしは命のパンである」と言っていることを引き合いに出し、それによって「ただ一種類のサクラメントのみが平信徒に与えられるように定められていると結論している」⁽¹⁹⁾。これに対してルターはマタイ26章27節（「皆、この杯から飲みなさい」）とマルコ14章23節（「彼らは皆その杯から飲んだ」）のキリストの言葉を挙げて、そこでは「皆」という言葉が結び付けられているのは「杯」であって、「パン」ではないと指摘し⁽²⁰⁾、秘跡を「パン」のみで十分とすることの誤りであることを主張する。そして「二種類の形色における秘跡を一般信徒から奪うのは、不信仰であり専横である。そのようなことは天使の権能にも属しておらず、いわんや教皇や公会議の権限にも属していない」と結論的に激しく教皇と公会議の横暴と誤りを弾劾する⁽²¹⁾。

ルターはトリエント公会議が始まったばかりの1546年に死去していたから、同公会議でどのような教令が出されるかを知るよしもなかったが、この問題、即ち「一般信徒の御血の拝領は教会間を区別する際立った特徴」となっており、またカトリック教会内にも混乱があり、ピオ6世教皇（1559-1565）はトリエント公会議終了後の1564年にドイツのマインツ、ケルン、トリーアなどの教区の一般信徒に対する御血の拝領を許可したが、84年にグレゴリウス13世（1572-1585）がこの「許し」を取り消した⁽²²⁾。

1551年10月の教令では「聖体には、それが用いられる前に、聖性の作者自身が現存している」とされ、それ故「聖体の秘跡のなかに、真に現実にして実体的にわれわれの主イエズス・キリストの体と血が、その靈魂と神性とともに、すなわちキリストの全部が含まれていることを否定」するものを排斥した。さらに1562年7月の教令では「救いのためにはどちらか一つの形色による聖体拝領で十分であることを絶対に疑ってはならない」、なぜならキリストは「すべての信者に両形色による聖体拝領を義務付けたのではない」からであるとして、「キリストを両形色の中に拝領するように制定したと主張するものは間違っている」とルター派的教説を否定した⁽²³⁾。

先に紹介したシュペーの書簡で語りかけられているニーファーゼンがルター派の立場を継承していたのは明らかだろう。他方シュペーは教皇の尖兵たるイエズス会士として当然のことに、公会議の教令に忠実であったことも先述の書簡から明白である。

だがこの書簡がどのような結果をもたらしたのかは知られていない。この説論的書簡によってシュペーは、ニーファーゼンが家族とともに改宗すれば、雇い人や農民たちが「*cuius regio, eius religio* 領主が領地の宗教を決める」に従って、領主とともにカトリック信仰を受け入れることを、密かに期

待していたのだろうと、ローゼンフェルトは推測している⁽²⁴⁾。

3. シュタイン家の三姉妹への書簡 ——旅の三人の姉妹と巡礼者の喩え話

1623年以降断続的にパーダーボルン、ヒルデスハイム周辺での宣教活動に従事していたシュペーは、28年には健康を害した同僚に代わってケルンのギムナージウム及び大学の教壇に立つようになった。おそらくはケルンに向う旅の途中か、ケルン近傍のリュルスドルフに旧知のシュタイン家を訪ねた。シュタイン家はカルヴァン派に属していたが、その当主は領地管理人 *Amtmann* を務めており、同じ職にあったシュペーの父親の知己であったと推測されている⁽²⁵⁾。その折にシュペーと三人の姉妹を含むシュタイン家の人々との間で、おそらくニーファーゼンとの間でなされたような信仰の問題が話題となった。その後再度の訪問を望みながらも職務に忙殺されて、その望みを果たすことが出来ずに過ごしているままに、シュペーは三姉妹に宛てて、真の信仰について考えるように促す二通の長文の書簡を書いている。その書簡の文体・語りかけの口調はニーファーゼンの時とは違って穏やかなものであるが、繰り返し真の信仰と魂の永遠の至福について想いを致すように勧めて、宣教師としてのシュペーの別の一面を見せている。

このヤコーベ、ゲルトルーデ、マリーア・エリーザベトという若い三人の姉妹は、何一つ不自由なく育てていたが、なじみのない領外の出来事には特に関心を抱くほどではなかった。とはいえライン地方のことには興味があるだろうと、シュペーは最近この地方で明るみに出た殺人強盗団の事件 *historia* を語って聞かせ、それを第一の書簡では喩え話に仕立て、第二の書簡ではいわばその喩えの謎解きをするように説明しながら、正しい信仰とそうでないものとの間での選択が喫緊のことであることを説き聞かせようとして

いる⁽²⁶⁾。

話はシュペー自身も何度か通りかかったことのある貴族の館を舞台として起ったのだがと始められる。ある有名な一族に属する高貴で高潔な如何にも騎士らしい人物が、ある出来事のために領主の不興を買って追放され、ついには貧困のどん底に落ち込んだ。そこで夜遅くなって自分の隠れ家の傍らを通りかかる旅人を親切に丁寧に接待するように見せかけて誘い込み、「美しい壁掛けや絵画で飾られた寝室」に案内した。だがその寝室の下には非常に深く暗い地下室があった。寝室には修道院の広い共同寝室のように何台ものベッドがきちんと設えられていた。それらのベッドで客人たちが安心して眠りに就いた頃、突然床が口を開け、ただ一台を除いて、他のすべてのベッドに寝ていたものたちは地下室に落ち込んだ。そこで待ち構えていた悪漢どもが、落ちてきたものたちの首を切り落とし殺害した。

あるとき三人の高貴な若い女性が旅の途中、その隠れ家に誘いこまれた。シュペーはそこで自分はその三人をよく知っており、つい半年ばかり前にもお目にかかって、親しくお話したこともある、と思わせぶりなことを挿入しながら、その後の出来事を続ける。女性たちは非常に歓待され、カード遊びをし、食後にはダンスも楽しんだ。そして何も知らずに例の寝室に案内された。そして、あたかも運を天に委ねるように安心して眠りに就こうとした。

ところでその晩そこには「不思議な仕方ですべてを、人殺しの企みを見抜き、熟知していた親切で善意の巡礼」が泊まっていた。巡礼は「キリスト教的同情心に駆られて、」一枚の紙に三人を待ち受けている恐ろしい危険について書きつけ、それを寝室のドアの隙間から差し込んだ。それを讀んだ三人は「一晩中絶え間なく祈り続け、全能なる神に身を委ねた。」

シュペーはここで、姉妹がどうなったかを語ろうとはせず、ただ「もし女性たちがあの素朴な巡礼の言葉を拒み、親切な警告を聞き流すなら、何と痛ましいことになるのか」と付け加えるだけで、第一の書簡を締めくくっている。

シュペーが第一の書簡（これには1628年とあるのみで、日付はない）で語った喩え話についての解説をしているのが、28年4月24日付の第二の書簡である。これは第一の書簡の約3倍の長さを持ったものだが、そこでシュペーは、まず喩え話の舞台となった隠れ家である館、殺人者、巡礼などが何を象徴しているかを解き明かす。

シュペーによれば、貴族でありながら領主の不興を買い盗賊に身を落した殺人者は、天使の中でもっとも位階の高かったにもかかわらず神の怒りを買った反逆者となったルチファーであり、壮麗な城あるいは館は神によって創られた美しく見事な世界である。哀れな旅人たちを呑み込んだ地下室は暗い闇の地獄であり、そこには「恐ろしい怪物、苦しみと責め苦、剣とナイフ、火と炎、蛙と蛇、苦痛と悲惨、苦難と死」が満ち満ちている。ベッドあるいは寝床は、この世にある様々な違った信仰である、何故なら信仰とはわれわれが快い眠りに就き、永遠の安らぎを期待するベッドに他ならないからだと説く。そしてあの三人の旅の姉妹はシュタイン家の令嬢たちであり、その姉妹に警告のメモを渡した親切な信仰心篤い巡礼は、いまこうして語りかけている自分自身であると言う。その上で厭うべきサタンによって魂が恐ろしい暗闇に引き込まれないようにと、三つの考えるべき要点を指摘する。

その第一は「この世には百以上の多様で対立する信仰がある」とし、カトリック、シュタイン姉妹が属するカルヴァン派、ルター派、ツヴィングリ

派、フス派、ユダヤ教、トルコ派等々を列挙し、しかもそのそれぞれが自分たちこそ唯一の正しい信仰だと主張していること。第二はしかしその中でたった一つだけが正しい信仰であり、他のすべては偽りであること。第三に知っておくべきことは、その唯一の正しい信仰を持たない限り、誰も永遠の至福は得られないこと。

その上でこの警告を「理性を持って洞察し、事柄を真剣に熟考し、大きな危険を心に留め」、神に呼びかけ、神が慈悲をもって危難から救い出してくれるように祈ることを勧める。そして三人の姉妹に自分の信仰が本当に正しいものであるか、吟味するように、自分の身にひきつけて事柄を考えられるように、その道筋が示されていく。

令嬢たちがいま属している信仰が正しいと思っているとしても、それは自分がその信仰の中に生まれたからに過ぎないからである。だがそのようなことは他の信仰をもっている人たちも思っていることであり、すべての信仰が正しいなどということはありません。令嬢たちがこれまでに、そのことをどれほど真剣に考えてきたか。シュペーは畳み掛けるように問いかける、「どのようにして、何故に、どこから、どのような手段やしるしによって、自分の正当性を主張し、唯一の正しい信仰を選び取った」と言えるのか。ベッドに就く前に自分のベッドが唯一の正しい、地下室に落ち込むことのないものであるかを吟味したのか、これほど重要な問題を正しく根拠付けるために、どれほどの時間と手間をかけたか、「読み書きを習うほどに、裁縫や編み物、縁取りをしたり、あるいは遊戯、ダンス、リュート演奏、カード遊び、ボードゲーム、そして社交に向けたのと同じほどの熱心さ、注意深さ、時間と手間とお掛けになってこられたか」、その四分の一の時間と熱意を傾けて、魂の永遠の至福を委ねるに足る唯一の信仰はどれであるかを吟味されたら

うか。

このように思いやりを込めて、しかし同時に厳しく究明を迫りながら、注目すべきことには、シュペーは三人の姉妹が正しいベドあるいは信仰を選ばなかったとも、どれが正しい信仰であるかをも言おうとはせずに、「いまはまだこのままにし、判断を下さずにおきます」と、あくまでも姉妹が自分で考えた末に決断するのを待とうとする。ただ「この世の華美に生涯の大部分を過し、信仰に関わる事柄の真実の考察に僅かな時しか費やさなかった魂」が「最後の審判の日に耐えられるかどうか」を心配し、姉妹が「あの諭え話を手掛りに」熱心に祈り、神の恩寵の助けを求めることを繰り返し勤める。そしてそのためにはどうすべきかを指示する。床に就く前に、床に跪き、心をこめて十字架上でキリストが受けた五つの傷に倣って、「主の祈り」を唱えるようにと。

時にくだけたやさしい口調で、時に厳しく自己省察を迫りながら綴られたこの書簡は姉妹と館の主夫妻を全能なる神に委ねるという挨拶によって結ばれているが、どのような結果をもたらせたのか、前述したニーファーゼンの場合同様、判明してはいない。ただニーダーライン管区の修道院記録係が、シュタイン家が信仰を回復したと記録しているものの、その家族がこのシュペーと親交を結んだ世代のことなのか、あるいはまたシュタイン一族の他の家系のことなのかには言及されていないという。またカルヴァン派の領主の掌中にあったリュルスドルフで、司教領主フェルディナントが後になって再カトリック化を遂行しえたかどうかもわかってはいないようである⁽²⁷⁾。

おわりに

以上によって異教の地、東洋で殉教も辞せずに宣教に従事することを望み

ながら、志を果たせなかったシュペーの戦乱のドイツでの活動を瞥見しえたかと思う。知識人ユンカー、ニーフェーゼンに対した際の論難するような、攻撃的とも言える姿を見せるシュペーは、神学的知見と素養を背景とした情熱的宣教師であった。そして若い女性に向って神の恩寵に援助を求めることを諄々と説くシュペーからは、告解を聴く聴罪司祭、教え子を修練に導く善き司牧者の姿が浮かび上がってくる。その両者に共通しているのは、シュペーが自分の手紙を読み終わったら、他のものたちから離れて、自室に引きこもり静かに真剣に手紙の内容を考え、神の援助を求めて、真摯に祈るのを勧めていることである。

そのような修練の道を段階的に系統立てて、提示しているのが『黄金の徳の書』である。その修養書はシュペーがケルンに滞在した同じ頃に、「信仰篤い女性たち」に求められたことを契機として成立したとされている。その浩瀚な書については、稿を改めて考察することとしたい。

注

- (1) バーダーボルの「イエズス会学寮史」には1624年にシュペーが土地の有力貴族ヴァルター・フォン・イムプゼン Walter von Imbsen のカトリック教会復帰に努力していたことが、おおよそ以下のように記されている、イムプゼンはルター派に移っていたが、いまや正しい道を再び見出し、9月17日に告解をし、赦しの秘跡を受け、母なる教会と和解した。夫人のオデーリアも夫に従った。夫人は、キリストの御体と御血が正当な方式で拝領されるなら、聖餐を併存説によって受ける必要はないことを確信するに至ったのち、カトリック教会に帰依した (Ritter, S. 156, Anm. 33. 原文はラテン語、ここでの要約はリッターによるドイツ語訳によった)。
- (2) この時期に関する記述は主として以下の文献による。Ritter, S. 16-28, Rosenfeld, S. 26-49.
- (3) Schröer, S. 128.

- (4) 「対抗宗教改革」は、通常はカトリック教会が「失われた勢力をいわば反攻によって回復しようとすることであり、同時に教会内における包括的刷新によって再カトリック化することであって、カトリック改革と対抗改革は互いに排除するものではない」(Schröer, S. 1)。例えば復活祭の時期における告解と聖体拝領の励行、カトリックでない住民もカトリック墓地に埋葬すること、16年には改宗する意思のないプロテスタントの貴族やその臣下には立ち退きを促すなど。また聖職者がいかかわしい女性と共住することを禁じ、違反した場合には解職するとして独身制の厳守の指令など。Schröer, S. 129-133.
- (5) またシュペーにケルン大学の学芸学部 *Artistenfakultät* の講義を委嘱する動きもあったが、シュペーが修士 *Baccalaures* であり、ヴェルツブルクで学芸修士 *Magister Articum* の学位を得ているものの、学部にも教授会にも属していないという理由で、学部長によって就任が見送られたという。Ritter, S. 20f.
- (6) ケルンの司教領主フェルディナントが1628年6月にイエズス会ニーダーライン管区長にパイネの改革にふさわしい神父を派遣するように要請し、その任務がシュペーに委ねられた (Ritter, S. 21)。また同年11月にはバーダーボルンの学寮から二人の神父をこの地区の宣教活動のために派遣するように管区長に要請があったが (Schröer II, S. 142)、この二名の内の一人がシュペーであったかどうかはわからない。
- (7) ユンカーの家に育ち、乗馬を好んだシュペーは、馬でパイネ教区の村々を巡り、短期間に20の小教区住民をカトリックに戻すことが出来た。また農民 *Landvolk* の間におけるこのシュペーの活動をローゼンフェルトは「まさにインドに行っていれば、そうであったであろうように」と評しているが、「間もなくその庶民に対する慈善家としての評判は、ヒルデスハイムにまで広がった」と述べている (Rosenfeld, S. 50f.)。
- (8) 殊にルター派牧師ヨハネス・ピセンドルフ牧師はイエズス会を激しく攻撃、ローマ教会の誤りを指摘していた。同牧師はケルンの裁判所で死刑判決を受け、29年3月に斬首された。その裁判にイエズス会が関ったことによって、同会に対するプロテスタント市民の態度は一層厳しいものになっていた (Ritter, S. 22)。また時期は遡るが、1624年にはフェルディナント司教領主によって、全住民に対して「告解と聖体拝領をなし、カトリック信仰を明確にし、子弟や雇い人にカトリックの教育を受けさせる」要請が

なされていた (Schröer II, S. 141) ことに見られるような強制的教化政策が、反感を買っていたことも想像されよう。そうしたイエズス会に対する攻撃的態度は、遙か後の時代の次のような言辞にも窺えるように思われる。「イエズス会はあらゆる偽装と偽名によってプロテスタント領主の館に忍び込み、またプロテスタントの家庭に、高貴な身分に忍び寄る (略) 住人の一部がカトリックで、一部がプロテスタントであるような土地においては、通常の詐術によるだけではなく、告解において、説教壇で、霊的訓練によって、カトリックの熱狂的信仰に火を付ける」(Queller, S. 67f.)。

- (9) 1640年代のケルン教区についてであるが、フェルディナント大司教の指示に基づいて、「神父たちは二人乃至三人で教区内を巡り、一箇所に数日滞在し、説教し、教理を教え、告解を聴いた」とあり、また50年代のヴェストファーレンでも「神父たちは町から町へ、村から村へ移動し、弛緩した教区の気分を立て直した」といわれている。Schröer, S. 212f.
- (10) Rosenfeld, S. 51.
- (11) リッターはこの二通のほか、ヒルデスハイムの最高法院長から司教領主宛書簡とイエズス会管区長宛のともに5月2日付の書簡及びヒルデスハイム学寮長から管区長宛5月8日付の書簡があったことを挙げ、さらに「ヒルデスハイム学寮史」のかなり長いラテン語による記録(ドイツ語訳付)を掲載している。Ritter, S. 22f., S. 163f., Anm. 49. また Rosenfeld, S. 53ff. 参照。
- (12) ヨハネ10章11-16節を挙げておく。「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命をすてる。羊飼いでなく、自分の羊を持たない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる。——狼は羊を奪い、また追い散らす。——彼は雇い人で、羊のことを心にかけていないからである。わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。それは父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのとおなじである。わたしは羊のために命を捨てる。わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かねばならない。その羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。」(『新共同約聖書』, 日本聖書協会, 1987年)。

カトリック教会では、日曜日のミサでの福音書の朗読箇所は、教会暦に従って決められており、第二ヴァチカン公会議によって規定された聖書朗

読配分によれば、当該箇所は復活祭後第五の日曜日に読まれることになっている。しかし古くは一部の祝祭日を除いては、今ほど固定してはおらず、また司祭の選択に委ねられていたこともあったようで、この報告に記されているように四旬節第四の日曜日、つまり復活の日曜日の二週前の日曜日に指定されていたのか、あるいはシュベール自身が選んだのかどうか、わからない。K.-H. Bieritz, S. 76, S. 97f., また K.-H. ビーリッツ, 91-93頁, 168頁。

- (13) ローゼンフェルトは、この報告はおそらく記録係が直接シュベール自身から聞きとったものだろうと推測している。Rosenfeld, S. 53.
- (14) Schröer II, S. 116f., S. 138.
- (15) Walter Dietrich von und zu Niehusen。この人物についてはただ書簡のなかで Junker とされ、Euer Gestrenger と呼びかけられているだけで、詳細は不明。
- (16) 以下の書簡の内容については、Ritter, S. 156, Anm. 32.
- (17) ローゼンフェルトはこのようなシュベールの言辭に注をして「堅苦しいバロックの時代にニーフーゼンに見られるような不遜は不敬、神の權威に対する不敬に匹敵する重大な犯罪と思われただろう」と述べている。Rosenfeld, S. 149, Anm. 7.
- (18) 『カトリック教会文書資料集』(以下『文書資料集』), 235頁。
- (19) ルター; 『教会のバビロン幽囚』, 8頁。CD-ROM 版では、編集者によって、この部分は省かれている。
- (20) 同上, 16頁。
- (21) *Luther deutsch* CD-ROM, S. 1, 360. またルター, 前掲書28頁。
- (22) *Handbuch der Dogmatik II*, S. 291.
- (23) 『文書資料集』, 289-305頁。
- (24) Rosenfeld, S. 150, Anm. 8.
- (25) Rosenfeld, S. 151, Anm. 12.
- (26) Ritter, S. 171-181, Anm. 56.
- (27) ローゼンフェルトは「シュベールのそれまでの働きから見れば、シュタイン家の姉妹が巡礼者の警告に心を留めたであろうことは、考えられないことではない」と付け加えている。Rosenfeld, S. 154.

参考文献一覧（本稿で言及・引用したもののみ）

- 1) Bieritz, Karl-Heinz: *Das Kirchenjahr. Feste, Gedenk- und Feiertage in Geschichte und Gegenwart*, Verlag C. H. Beck, 1994. 邦訳は K.-H. ビーリッツ：『教会暦 祝祭日の歴史と現在』, 松山興志郎訳, 教文館, 2003年。
- 2) Luther, Martin: *Luther deutsch. Die Werke Martin Luthers in neuer Auswahl für die Gegenwart in 10 Bdn*, Hrsg. v. Kurt Aland, Vandenhoeck und Ruprecht, 1991. CD-ROM (Martin Luther: Gesammelte Werke, Directmedia Publishing GmbH, 2002).
- 3) Queller, Eduard: *Die Jesuiten, wie sie waren und wie sie sind*, Verlag von Carl & J. Alemann Berlin, 1845. Reprintauflage von Reprint-Verlag-Leipzig ohne Jahresangabe (2004?). なお Queller (1809–1853) は、ウィーンに生まれ、ドイツ各地を転々とし、ドイツのカトリック教会をローマ教皇の桎梏から開放しようとした運動、ドイツ・カトリシズムに積極的に参加した著述家。
- 4) Ritter, Joachim-Friedrich: *Friedrich von Spee 1591–1635. Ein Edelmann, Mahner und Dichter*, Spee-Verlag Trier, 1977.
- 5) Rosenfeld, Emmy: *Friedrich Spee von Langenfeld. Eine Stimme in der Wüste*, Walter de Gruyter Berlin, 1958.
- 6) Schneider, Theodor (Hrsg.): *Handbuch der Dogmatik II*, Patmos Verlag, 2000.
- 7) Schröer, Alois: *Die Kirche in Westfalen im Zeichen der Erneuerung (1585–1648) II*, Aschendorff Münster, 1987.
- 8) デンツィンガー／シェーンメッツァー：『カトリック教会文書資料集（改訂版）』A. ジンマーマン監修, 浜寛五郎訳, エンデルレ書店, 平成4年（改訂4版）。
- 9) マルティン・ルター：『教会のバビロン幽囚 他二篇』（ルター選集Ⅲ）, 藤田孫太郎訳, 新教出版社, 昭和32年。